



11月21日に開催されたオマーン建国記念日式典で、民族衣装や香水などさまざまな民芸品が展示されていた。今回、式典で展示されていたオマニーシルバーと呼ばれる銀製品等について大使館の一等書記官アリーグアルアムリさん、報道官小泉アシュラフさんに詳しい話を伺った。

銀製品はすべて手作りで、細かい模様や花が彫り込まれている。ロケットペンダントのようにペンダントヘッドが開閉でき、中にコーランの言葉を刻むことのできるヘレズムサルサル（写真1）や、ベンケリと呼ばれる女性用のブレスレットなどきらびやかな銀製品（最近では金製品も多くある）があった。



（写真1）ヘレズムサルサル

その中でも気になったのが香りにまつわる銀製品である。

写真2の柄が長いものはムラッシーと呼ばれるもので、中に水とバラを入れ、バラのエキスを抽出し「バラ水」をつくる。そのバラ水で手を洗う、または首筋につけほのかなバラの香りを残す。主に結婚式などの特別なイベントで使われるそうだ。

同写真左下の銀製品はマグマルと呼ばれるもので、日本でいうところの香炉である。マグマルの中に入れるのはフランキンセンス（乳香）。アロマテラピーに興味のある方なら一度は耳にした名前ではないだろうか。

オマーンの南部ズファール地方は世界最大のフランキンセンスの産地として知られている。フランキンセンスはカンラン科の木から採取された樹脂を固めたもので、ミルクのような乳白色が特徴的（写真3）。最高級品としてクレオパトラやシバの女王など権力者たちに珍重された。

そのフランキンセンスをマグマルの中に入れ、炭で焚くと香りとともに煙が出てくる。焚く前のフランキンセ



（写真2）ムラッシー（真中）、マグマル（左下）

ンスの香りを実際に嗅いでみるとほのかに清々しい香りがした。アロマの効能を調べてみると、抗ストレス、鎮静、抗菌などの効果が期待でき、抗菌作用により、呼吸器に働きかけることで、咳や喉の痛みなど呼吸器系の不調の緩和に役立つそうだ。

オマーンでは、香りは悪い霊を取り払うともいわれており、毎日の生活に密接している。外出前に服をハンガーにかけ、その下からマグマルでフランキンセンスを焚き、衣服に香りを含ませる。また、大使館でも係の方が毎朝、フランキンセンスを焚き、香りを大使館に充満させる（余談だが、煙を出しすぎると火災報知器が作動してしまうので気を付けなければいけないそうだ）。

美しいオマーンの銀製品と香りに包まれた時間は気持ちの余裕さえ感じられる。ぜひ自身の生活にも取り込んでみたい。
（調査員 波戸）



（写真3）フランキンセンス（乳香）